

## 異形の神智学者

鎌田東一

哲学者、宗教学者。1951年生まれ。京都大学名誉教授、上智大学クリ  
フケア研究所特任教授、放送大学客員教授、日本臨床宗教学会副会長。

## 1 異形の神智学者

諸星作品を初めて読んだのは1970年代であった。当時、漫画月刊誌の『ガロ』（青林堂）と『COM』（虫プロ商事）を愛読していたので、『COM』で初めて読んだのだと思う。最初に読んだ作品が何であったのかはよく思い出せないが、『暗黒神話』を読んだ時には興奮した。その作品がこの時代の「暗黒」の宇宙性を探究する冒険的精神と越境的侵犯性に充滿していたからだ。1960年代の文化の奥底に流れて

いるのは「暗黒」志向であった。土方巽が提唱した「暗黒舞踏」がその代表で、その親戚のような寺山修司や唐十郎や磨赤児などの「アングラ（アンダーグラウンド、地下）」もその一派である。梅原猛の怨霊史観もその文脈の中にある。

表の世界で威儀正しく振舞ってきた体制的権威が崩落し、オルタナティブな生き方や体制が求められていた。「反体制」「カウンターカルチャー」「ニューエイジ」もその時代の指標を示す合言葉であった。諸星大二郎はそのようなこの時代の「暗黒」表現を存分に吸収し、その養分をたつぷりと吸い込んで、独自のナラティブ

912年）神智学協会ドイツ支部の事務総長を務めていた。この「神智学」は、19世紀後半に発生してきたさまざまな霊的関心や志向性を磁石のように牽き付けて膨れ上がった隠された叡智の探究運動である。それは、かつて世界中のいろいろな地域や時代に諸種の霊的叡智が息づいていたが、科学技術や産業文明の発展の中で隠され見えなくなってしまったので、その不可視の霊的叡智をふたたび新しい「神智（theosophy）」ないし「グノーシス（霊的認識）」として現代的オルタナティブな知恵に再編しようとする霊的叡智復興運動であった（※1）。

この神聖なる霊的叡智の普遍的価値を再構築していこうとする神智学の運動が「表の正統派神智学者」たちの霊的探究運動であるとすれば、諸星大二郎の探究は「異形の神智学者」の孤独な独自の探究と表現であると位置づけることができる。そしてそれは、1960年代後半から1980年代前半に雨後の筍のようにおびただしく発生してきたアングラの「暗黒」ナラティブの諸星ヴァージョンであった。もちろんそこに、よく言われているように、ラヴクラフトなどの「クトゥール神話」の影響もあっただろう（※2）。

たしかに、世界中には不思議な伝承や経験智が埋蔵されている。それを掘り起こしてみることには人類史的な普遍的価値がある。しかしそれは、表の「光明神話」である。実態は、そこに、血生臭い闘争、殺戮、隠蔽、封印など、も

ろもろの隠されたダークサイドが眠っている。それを目覚めさせる時にはそれなりの騒乱と犠牲が伴うことになる。そうした影の裏の、「異形の暗黒神智学」のメッセージを諸星大二郎は独自の形で深掘りしたのである。

## 2 妖怪ハンター！ 稗田礼二郎はなぜ「考古学者」でなければならなかったのか？

諸星大二郎を「異形の神智学者」として見立てたことには理由がある。わたしは諸星大二郎とほぼ同世代であるが、諸星が漫画作品として発表し続けていた世界を、実際に「裏神業」として、また一種異形の「学術研究」として探究していたからである。この点で、勝手に、諸星大二郎にある種の同志的など言ったら大げさだが、同類・同伴の親和性を感じつづけてきた。たとえば、近代日本の宗教運動に、出口なおと出口王仁三郎という二人の個性的な教祖によって主導された「大本」という宗教運動があった。ルドルフ・シュタイナーが神智学協会のドイツ支部事務総長として活躍し、その後人智学協会の創始者として幅広く影響力を広げていた同時代に、『神霊界』という教団機関誌の中で神智学やブラヴァツキーについて言及しながら、日本宗教史に隠された神の神意（経緯）と威力（神力）を再生せしめようとした。「封印された神・良の金神」を「お筆先」大本神論（字

を編み出した。その獨創性に敬意を表するとともに、同時に、その時代の霊性（精神）とも言わべき熱気・潮流にも注目したい。

この独自の『暗黒神話』を物語りつづけた諸星大二郎を一言で形容するとすれば、「異形の神智学者」となる。なぜそのような命名になるか、少し説明してみよう。

そもそも「神智学（theosophy）」とは、ロシアの霊媒で神秘思想家のヘレナ・ペトロヴナ・ブラヴァツキーたちが創立した団体「神智学協会」の基本理念を表わす言葉である。「シュタイナー教育」の提唱者として知られているルドルフ・シュタイナーも、一時期（1902-11として再開しようとしたのが大本の宗教運動であった。

この運動はしかし、大正10年（1921）と昭和10年（1935）に新聞紙法違反や不敬罪や治安維持法違反により2度の弾圧を受け、徹底的に破壊された。その運動の主導者の一人である出口王仁三郎が自分の霊性の本源をスナノヲに見、その贖罪の再興を図りつつ、さらにそれを「みろく」や「いづのめ」の神のはたらきとして拡張展開していく流れと、『暗黒神話』の主人公の山門武少年が日本各地の8カ所の古代遺跡や神社を巡り、その秘密を解き明かしながら、56億7千万年後の世界に再臨して衆生を救済するという未来仏・弥勒菩薩信仰とが連動し重合するのはスリリングな符号である。大本の裏神業に従事する人々は、現実には、山門武や菊池彦や竹内老人と共通する幻視的霊視の世界を生きていたのである。

しかも、山門武同様、出口王仁三郎はみづからをオリオン（三ツ星）の化身とも述べている。『霊界物語』第5巻総説（天声社／1922年）の中で、出口王仁三郎は「ア、末世澆季の今日、オレゴン星座より現われきたるキリストは、今や何処に出現せむとするか。その再誕再臨の聖



地は、はたして何処に定められしぞ。左右の掌指の節々に、釘の跡を押し、背部にオレゴン星座の移写的印点を有して降誕したる救世主の出現して、衆生に安息を与うる日は、はたして何れの日ぞ」と口述している。出口王仁三郎の背中には三ツ星にも似た黒子があり、彼はそれをオリオンの移写とも救世主のしるしであるともとらえた。『水鏡』の中には、「オリオン星座を地にうつすのが月宮殿であつて、敷地も同じ形に出来て居る」（『出口王仁三郎全集』第6巻／天声社）と述べ、オリオン星の地上における移写が亀岡の聖地の聖建築である「月宮殿」であつたとする。また、「五大州に腰を据えたる心地してわれはオリオン星座に楽しむ」「オリオンの星座をわけて瑞月の輝く御代を待ちつつ生くるも」「オリオンの星座ゆ出でたる月こそは時を待ち得て世を救うらん」「オリオンの星座を出でて世を救う月の光は闇夜を照らさむ」などのオリオン歌を発表している。

このような近代日本の宗教運動の歴史をふりかえつてみると、諸星大二郎の『暗黒神話』にはけつして荒唐無稽の物語とは言えない「暗黒神話系」ナラティブの潮流が脈々と流れていることがわかる。そしてそのような「暗黒神話系」ナラティブが、諸星により再編集され、つづいて発表されていく「妖怪ハンター」でより具体的に掘り返され、展開された。

『暗黒神話』の山門武が『古事記』や『日本書紀』に記されたヤマトタケルの化身であり神話の読み替え（再解釈）であつたとすれば、『妖

怪ハンター』の主人公であり、また狂言回しでもあり、能で言う「諸国一見の僧」の「ワキ」（怨霊の秘密の話を聴き取り、その祈禱力で成仏させる役割）でもある「稗田礼二郎」は、もちろん『古事記』の「誦習」者である「稗田阿礼」の子孫にして化身である。しかし、それに加えて、稗田礼二郎は「異端の考古学者」として設定されているのだ。

『妖怪ハンター』『黒い探検者』の冒頭では、稗田礼二郎は、民俗学や宗教学、古文書学などにも幅広い興味を示す学者だが、その本業は考古学である。だが、異様な事例や奇怪な題材にばかり手を出すので、学会からは異端者扱いされていた。若い学生や一部のマスコミからは、妖怪ハンターなどというアダ名もつけられていた」と説明されている。

なぜ稀代の「ワキ」と言える稗田礼二郎が「考古学者」として設定されねばならなかつたのか？なぜ彼が、民俗学者でも、神話学者でも、宗教学者でもなく、考古学者でなければならなかつたのか？それには明白なる理由があるはずだ。

たしかに、稗田礼二郎は民俗学的口承伝承に興味をもち、それに通暁し、その物語世界をここにしながら、地域の秘密を明らかにしていく。その多くは神社や古墳などにまつわる民間伝承や神話伝承なので、彼が民俗学者であつても、宗教学者であつてもよかつたはずである。しかし、稗田礼二郎は考古学者でなければならなかつた。

それは、考古学者が「時の旅人」であるから

である。民俗学者は、基本的に地域に伝わる口承の民間伝承を採集しつつ、歴史学的な文献に上つてこない言い伝えなどを聴き取りしながら、地域文化を支えている伝承世界を再構成し、庶民の宗教世界の様相を明らかにしていく。柳田國男や宮本常一がそうした典型的な民俗学者と言えるが、しかし、民俗学者は地域に伝わる伝承世界を標本したり分類したりすることはできて、それがどの時代のどのような背景から生まれてきたのかなどの、伝承起源や神話の歴史的背景などを時を超えて考察することができない。少なくともそのような学問的方法論をもたない。

そこで、考古学の登場となる。考古学は英語では「archaeology」と言う。ギリシャ語の語源「*αρχη* (arche)」つまり、起源や原理をロゴス的に探究し考察する学問で、実証的な経験科学として遺跡に埋蔵されている遺品を手がかりに考察していく。それにより考古学者は遺跡の遺品の年代測定や推定を重ねることで「時の旅人」であることができるが、ほとんどの考古学者は宗教学や神話学や民俗学などの隣接する学問の成果を直接取り入れたり参照することはない。それは遺跡の物質文化である埋蔵物だけをアライバイとしてその時代の存在証明をする学問だからである。

しかしながら、稗田礼二郎はそのような固定的な考古学的唯物論に縛られることがない。自由自在に口承伝承を徹底追及し推理する。そ

で、民俗学的・宗教学的・神話学的探究と接合し、大胆不敵に謎解きをし、独自の稗田ワールドを作り上げる。それを折り目正しい学問的禁欲を金科玉条として保持する正統考古学者が認めるわけではない。そこで、稗田礼二郎は「異端者扱い」され、「K大学」（わが母校國學院大学ではないだろうね？）教授の職を退任した（あるいはさまざまな軋轢や圧力により退職させられた）ということにされている。そして、いくつかの大学で非常勤講師をしながら、不安定ではあつてもよりフリーな立場で自由自在に好きな研究をつづけ、論文を発表しているというわけだ。

もう一つ重要なことがある。民俗学者は遺跡を発掘することなどしないが、考古学者は遺跡発掘を中心な仕事とする。つまり、民俗学者は謎を秘めた古代遺跡に入つて調査することのできる通行手形を持っていない。これは、「異形の神智学者」である稗田礼二郎にとつては、決定的に不利な学問的制約である。彼は遺跡を介し、その『暗黒神話』を遺す遺跡＝人工洞窟＝別宇宙（異世界）への孔を通過することによって縦横無尽の神話的宇宙のつらなりに秘儀参入し「妖怪・怪異」を鎮めていく必要があつた。それこそが『妖怪ハンター』という現代の「諸国一見の僧（神主？）」の大仕事なのだから。

こうして、『暗黒神話』ナラティブから『妖怪ハンター』ナラティブへの拡張的語りの中に、たしかに「異形の神智学者」諸星大二郎の恐るべき言霊が炸裂し爆発しているのである。

## 特別寄稿 異形の神智学者

### 3 未来ノスタルジア

「芸術は爆発だ！」と言い放ち、自分も爆発炸裂しながら、日本におけるその爆発の根源として、縄文の土器や土偶を「神聖エネルギー」とか「超自然の力」とか、「無限に回帰するダイナミズム」。深淵をはらんだ空間性」と喝破したのが岡本太郎であつた。

諸星大二郎の『暗黒神話』は、そのような「無限に回帰するダイナミズム」や「深淵をはらんだ空間性」を表現している。おそらくそのことを、諸星本人も自覚しているだろう。というより、主人公の山門武はそのような「神聖エネルギー」や「無限に回帰するダイナミズム」に衝き動かされてブラフマンとしてのスサノヲと接神したのである。そのようなエネルギーやダイナミズムなしに、56億7千万年の弥勒菩薩のスペース・オデッセイ（宇宙の旅）などできやしない。

非ユークリッド幾何学の創始者であるロバチエフスキーが示したように、負の曲率を持つ空間では平行線が交わることなく無限大に背反してゆくという。ここでは、遠くにあるものが近くに見えるような、無限遠点にいる弥勒菩薩がすぐそこにいるような錯視が生まれる。弥勒菩薩は、今ここにいる私であると、稲垣足穂の自伝的小説『弥勒』の主人公は悟る。

諸星大二郎の漫画を読みながら、そんなデジャヴ的な既視感と、塵墟のような未来ビジョンと、暗黒を潜り抜けて生まれてくる宇宙に対する奇妙なノスタルジアの混在を感じることもたまある。それこそ、ロバチエフスキー空間とともに反転するような、「無限に回帰するダイナミズム」そのものの奔流である。

新型コロナウイルスと自然災害のパンデミックに冒され、破壊的な様相を示しつつある今、この、この世界の中で、諸星大二郎が発信している『暗黒神話』の「福音」を読み取る必要がある。「諸星大二郎展」はその福音書の第1ページである。

※注

(1) ちなみに現在の日本の「神智学協会」のHP (<http://theosophy.jp/>)には、「神智学」と「神智学協会」についての説明が載せられている。(「神智学」とは、文字通り「神聖な智慧」です。それは神聖な知識であり神聖な科学です。時代や地域や民族や国や文化を越えて普遍的に存在する神聖な智慧の教えです。そのような神聖な智慧が、それこそ時代や地域を越えてあらゆる国や民族や文化の中に「智者」とか「インシエート」と呼ばれる人々によつてもたらされてきました。それは、それぞれの地域性や民族性や文化に合わせて言葉を変え、形を変えて伝えられてきました。)(「神智学協会は、1875年11月17日にニューヨークで、H.P.ブラヴァツキー夫人とオルコット大佐等により組織され、1950年4月13日にインドのマドラスにおいて法人組織となりました。その三大目的は次の通りです。(1) 人種、信条、性別、階級、肌の色の違いにとわれないこと、人類愛の中核となること。(2) 比較宗教、比較哲学、比較科学の研究を促進すること。(3) 未だ説明されない自然の法則と、人間に潜在する能力を調査研究すること。)(2) このあたりの時代思想の潮流については、拙著『神界のフィールドワーク―靈学と民俗学の生成』（創林社／1985年／ちくま学芸文庫／1999年）を参照されたい。